

りんご酒づくりの始まり

生食用りんごの他に大量に生じる加工用りんごの開発に迫られ、りんご酒づくりに関心が高まる

本格的なシードルづくりへ

日本初の本格的な国産シードルの誕生

1899

年頃(明治32年頃)

- 弘前市松森町の松木淳一が、りんご果汁に砂糖を加えて発酵させたタイプのりんご酒を販売。

1930

年(昭和5年)

- 竹館産業組合がフランスの商社と共同でシードル醸造を企画。

1939

年(昭和14年)

- 佐藤弥作と田中武男が黒石市で「御幸シャンパン商会」を立ち上げる。

1940

年(昭和15年)

- 「御幸シャンパン商会」が弘前に移転し、「御幸商会」と改称。りんご酒と発泡りんご酒が製造される。工場は何度か移転し、弘前市富田町の弘前銘醸株式会社の工場や、福島藤助が建設した弘前市吉野町のレンガ建の工場(現弘前れんが倉庫美術館)にあった福島醸造が借用される。

1941

年～(昭和16年～)

- 太平洋戦争の戦時下の米不足で日本酒が制限され、補うためりんご酒が製造される。

1953

年(昭和28年)

- 福島醸造を引き継いだ弘前の酒造メーカー社長吉井勇が2ヶ月にわたりヨーロッパでシードル醸造法を視察し、技師を招聘。シードル事業に着手する。

1985

年(昭和60年)

- ニッカウキスキーが非加熱製法でフレッシュなニッカシードルを発売。
※後に現アサヒグループホールディングス株式会社がニッカウキスキーを子会社化。現在に至るまでニッカウキスキー弘前工場でシードルを生産し、全国展開している。



1972

年(昭和47年)

- ニッカウキスキー弘前工場で、「ニッカシードル」を生産・販売。



1965

年(昭和40年)

- ニッカウキスキー弘前工場が弘前市栄町に新工場を建設・移転。



1960

年(昭和35年)

- ニッカウキスキー創業者である竹鶴政孝にシードル事業の引き継ぎを依頼。ニッカウキスキー弘前工場が誕生。



1956

年(昭和31年)

- 「アサヒシードル」を発売。日本初の本格的な国産シードルを市場へ送り出した。



1954

年(昭和29年)

- 朝日麦酒株式会社(現アサヒグループホールディングス株式会社)と連携し、「朝日シードル株式会社」を設立。



新たなシードルづくりへ

「クラフトシードル」づくりがスタート

2006

年(平成18年)

- 「青森県林檎酒研究会」設立。
※事務局:現(地独)青森県産業技術センター 弘前工業研究所

2010

年(平成22年)

- 「六次産業化・地産地消法」創設。「弘前ハウスワイン特区」に認定。

2012

年(平成24年)

- フランス・ノルマンディー地方ブーヴロン・アン・オージュ村を視察し、弘前とシードルの技術指導について協定を締結。



2013

年(平成25年)

- 「あおりりんご酒推進協議会」を設立(事務局:A-FACTORY)。「弘前シードル研究会」(事務局:弘前市)を設立。シードル醸造希望者がブーヴロン・アン・オージュ村を訪問。



2014

年(平成26年)

- 「弘前ハウスワイン・シードル特区」に認定され、弘前市内で生産されるりんご・ぶどうを原料とした果実酒を市内で製造する場合の最低製造数量基準が年間6キロリットルから年間2キロリットルへ引き下げられた。
- 弘前で初めてとなるクラフトシードルが販売され、弘前市内にクラフトシードルの醸造所が増え始める。
- 「シードルナイト(りんご酒グランプリ)」初開催。
- 市内シードル醸造所 3者。



2021

年(令和3年)

- 「弘前シードル研究会」が「弘前シードル協会」に改称し、民間主体の団体として活動を開始。

2023

年(令和5年)

- 吉野町緑地で行われた「ひろさき『まちなかピクニック』2023」で、「シードルナイト」を含むシードルイベント「シードルピクニック」を開催。
- 市内シードル醸造所 8者。

